

うか、と自問することがあった。

結局、長野県師範学校に進んだとしても、五無齋の活動の軸足が、生涯、神聖と信じた教育の場から離れなかったように、我もまた紛う方無く、書の芸術性の追求と若き才能の育成、書の普及に基軸を置いた人生を歩んだであろう、と天来は自答した。

野沢の有隣義塾に入塾してからも、天来は五無齋の存在が気になった。しかし、長野県師範学校入学後の五無齋の噂を耳にすることはなく、天来が、五無齋の名前に再び接したのは、10数年後である。

上京して4年目を迎えた明治34年の或る日、天来は、郷土の新聞で、蓼科小学校長兼蓼科農学校長である五無齋の、「人ノ子ヲ賊ヒシコト慟カラズ……。」という退職広告を読み、その判断を惜しんだ。五無齋という人物は教育一途で、未永く学校教育の場で活躍するものと思いつ込んでいたからである。

天来は、五無齋が33歳で10年間の教師生活を辞した事由を推し量った。何か必ず退職広告には記載されていない真の、複雑な理由がある……。

師範学校卒業生に課せられた10年間の就業義務年限が終了したからか。いや、そんな単純な理由ではあるまい。では、修身科廃止の主張が通らず、県及び郡当局に対する憤りや失望を覚えたからか。

それとも、何らかの無常感に襲われ、学校教育に嫌気がさしたからか。やはり、後に「地球をぶっ欠いて商いにする職人」を自称した五無齋の鉱物標本採集家としての情熱、すなわち、「石の狩人」の本能が勝り、信濃漫遊の途に就くことを望んでいたからか。

だが、五無齋の退職の本当の事由を知る術はなく、天来は自分に、退職広告の記載の通り、生徒の資質や個性を存分に伸ばすことができなかった教師としての己に対する自責、そして、その基にある教育に寄せる真心こそ、五無齋の退職事由であろう、と言いつ聞かせた。

日露戦争直後、善光寺中靈殿を参拝した海軍三將軍の歓迎の宴が行われた長野市、城山館で、五無齋が歓迎の四首を押しかけ朗詠した一件を報じた新聞記事には、天来は、自分がその会場に列していたかのような愉快を覚えた。連合艦隊司令長官、東郷平八郎海軍大將が五無齋を、「信州には、怖い人がおられますね。」と評し、その風貌を江戸後期の壮烈な勤皇家、高山彦九郎に比したという記事に、天来は、高山なる人物を五無齋の精神な容貌から逆に連想した。

天来は、郷土の新聞に連載された「地質学」に関する記事も折々読んだ。

五無齋が、向学心がありながら貧困によって中等学校に入学できない生徒のた

めに長野市に開設した保科塾も、天来を大いに感心させた。

横鳥村全戸に配布されたという五無齋の狂歌集「よいか、をほしな百首け」を読み、天来は、五無齋の豪放な言動の奥底にある繊細な優しさや寂寥感に触れた思いがした。



立科小学校体育館の扁額「質実剛健」

五無齋の書状を開封して、天来は思わず目を見張った。駿馬が大草原を疾駆するかのよう力強く、伸びやかに毛筆が躍動していたのである。

天来は、五無齋が北佐久教育会の席上で詠んだという狂歌をつぶやいた。

駄馬野馬馬車馬多き世の中に

我は千里の馬にぞありける

この狂歌を、天来はふとした拍子に知

らず口にしていた。

後年、天来は、その著書において、「字形ばかり気にする、墨を塗ったような勢いのない書は俗物である。書に大切なのは、筆勢と筆意である。筆意は筆勢にある程度は自然に含まれるから、運筆飛ぶが如しの筆勢が最も大切である。筆勢のない書ほど困ったものはない。」と説いているが、五無齋の書状に、まさにその凄まじいばかりの筆勢を見たのである。

五無齋は卓越した書家である、と語る人が少なくないが、千里の馬のような筆勢こそ、その所以であろう。

天来は、五無齋の「明治42年開校の運びの横鳥尋常小学校に掲げる扁額を是非とも貴殿に揮毫していただきたい。揮毫の文言は貴殿に御一任致す……。」という依頼を承諾し、即座に返信を認めた。ご依頼の件、相承ったこと、そして、揮毫する文字は、貴兄の教育実践の基底をなすと拝察される「質実剛健」とするがよろしいか、と問うた。

五無齋から折り返し書状が届いた。

この2月、上京するので、その折に訪問し、御作を頂戴致したい。「質実剛健」という字句を選ばれたことに感涙を禁じ得ない、という簡潔な文面であった。